

当文書は2015年7月に国会議事堂前において実施された安保法制に関する抗議活動の所感及びその特徴について述べる。

#### 【概要】

2015年7月15日、所謂安保法制の委員会審議が打ち切れ自民党、公明党を中心に強行採決が行われた。これと相前後して当該法制及びその審議に対する抗議活動は一段と活発化している。

国会議事堂正門前においては、総がかり行動実行委員会主催による抗議活動やSEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）主催による抗議活動が行われた。当日の参加者は主催者発表で約5万人。参加者は桜田門駅または国会議事堂前駅より徒歩にて又は桜田門駅よりタクシーにて現地へ参集していた。桜田門駅より来た参加者の弁によると、警察による道路封鎖及び現場への異なるルート、遠回りとなるルートへの誘導が意図的に行われており、多数の参加者が当誘導により現場への到着が大幅に遅れる事態が発生したとの事。この問題は、参加者及び関係者のTwitter等でも指摘されている通りである。

現場は、主催者により参加者のエリアが区切られており、国会議事堂を正面にして右サイドが個人参加者、左サイドが労働組合等の団体へ振り分けられていた。設置式スピーカーは憲政記念館前から桜田門駅へ向かう方向まで数か所に設置されており、主催者の説明等は端の参加者まで良く聞こえていたと思われる。また、メインとなる歩道上にはステージ（高さ80cm、広さ1㎡程度か）が設けられ、そのステージを照らすように照明が設けられていた。更に、ステージ正面ガードレール直近に報道機関用のエリアが設けられていた。更に、参加者用の給水所としてケータリングカーが設置されていた。

#### 【内容および特徴】

総がかり行動実行委員会主催による活動は、主催者および賛同団体等によるアピール、全体のシュプレヒコールなどが行われ、国政政党からは民主党、社民党、共産党の国会議員によるアピールが行われた。これらアピール内容等に関してはとりわけこれまでの活動と比較し、特筆すべきポイントは見出すことはできなかったが、参加者の年齢、支持政党の幅はこれまでになく広いものと思われた。18:00前の段階では、60代以降と思われる世代や東京弁護士会の弁護士等が目立っていたが、時が進むにつれ、仕事帰りの労働者や子供連れ、学生などの姿が増え始めた。それぞれ、友人、知人から誘われ国会前で待ち合わせしていた者が多かったようだ。

18:30~19:30までの特徴、印象をまとめると、①参加者年齢層の広さ、②民主、社民、共産の支持者或はいずれの政党も支持しない者が一同に会した事、③現地での待ち合わせ、の3点である。

①に関しては先述の通りであるが、②においては、かつての有事法制反対集会等で共産党系と非共産党系が一同に会したことはあったが、当時は年齢層に今回程の幅はなく、また参加者それぞれの党派色も濃く出ていた。③に関しては、②で述べた様に党派色が薄く、所謂一般市民が多く参加した結果、個々人が連絡を取り合い、休日に遊びに出かけるかのような雰囲気知人らと待ち合わせ、また現地において携帯電話等で連絡を取り合うと

いった光景もあちこちで見られた。

参加者らは服装や荷物など普段の生活の延長線上の様なスタイルそのままに現地へ来ており、これまでの集会、デモにおいてよく見られたゼッケンやのぼり旗といった団体の存在を主張するグッズを身に着けている者は余り見られなかった。これは、これまでの集会やデモにおいて中心的存在であった政治団体や労働組合等との関係の範囲外にあった人々が多く参加していたことを証するものであろう。

では、何故これまでと異なるスタイル、帰属団体との関係によらない抗議活動が短期間で多くの人々を集め、拡大したのであろうか。

まず、何よりも本法案への不安と安倍自民党を中心とする勢力の民主主義否定の言動の数々が前提にあるが、これには、労働組合組織率の低下に加え、これまでの動員手法が功を奏しなくなるとともに、新たな動員ツールとしてTwitter、facebook、LINEといったSNSが台頭してきたこと、又、これらの同時中継的即時性、双方向性によるところが大きい。一例として警察による道路封鎖等の状況を逐一アップし、それらに即自的に対応し、更に対応策やその他追加情報をもフォロワーによりカバーされるといった状況があった。これにより、主催者は自らの負担を軽減するとともにフォロワーには「主体的に参加している」といった参加者実感をもたらす効果があるものと考えられる。さらに、相乗効果として、党派、労働組合等の団体が前面に出ないことにより、それら組織外の人々が飛び入りで参加しやすい雰囲気醸成したことも運動の拡大に繋がった要因の一つと考えられる。

上記活動が一旦、区切りを迎えた後、SEALDs主催の抗議活動が場所、ツールを引き継ぎ行われた。

主な流れは、主催団体および協力団体、学者、国会議員によるアピールの後、シュプレヒコールをあげるものであり、プログラム上は前述のものと同様ではない。

なお、この時点において18:30からの行動より参加者数は相当に増えており、その顔ぶれも比較的若い世代の増加が目立っていた。

参加者にはオリジナルのプラカードを作成し持ち寄る者、ネット上に公開されたプラカードをコンビニプリントにより印刷して持ち寄る者も多くいたが、主催者においても多数のプラカードを準備しており、現場にて”手の空いている”参加者に手渡していた。音響は前述18:30からの物に加え、数基のトラメガを持ったスタッフが参加者の中へ配置され、コールの効果を高めていた。トラメガのマイクはスタッフがコールすることもあれば、周りの参加者に預けることもあり、これは主催者のプラカードでも同様に、主催者から参加者へ手渡されたり、手渡された者が又、周りの者に預けたりといった光景が見られた。なお、ステージ後方には固定脚によるトラメガが1基設置されていたが、これはメインステージのコールを増幅する為に用いられていたようだ。

主催者によると「途中参加、途中退場OK」「疲れたら、周りの人に任せちゃって全然OK」との事で、このような、「軽い雰囲気」のアナウンスも参加者の気軽な参加と離脱を促す一助となっていた。

しかしながら、参加者に対する現場の道路上の注意点や給水所の案内など必要なアナウンスに関しては、幅広い世代の参加者にもきちんと伝わるものであり、又、彼らの広報における立憲主義や安保法制の問題点の説明文等からは、これら制度の理解に加え、その文章の内容も熟議を重ねたものであることが伺える。つまり、彼らは軽い雰囲気での運動を形成しているが、軽い気持ちで行動しているのでは無い。

次に、彼らのサイトやパンフレットにおける構成、写真、ロゴなどデザインの洗練性は、特徴としてよく挙げられる点であるが、加えて、コールのリズムや言葉も、これまでの集会等で用いられたものと異なる特徴を見せている。コールのリズムはこれまでのシュプレヒコールと異なり、ハイテンポである点が挙げられる。コールのテンポは場の盛り上がり方によって、よりテンポを速めたり、二連三拍のテンポに乗せ「ア・ベ・ハ・ヤ・メ・ロ」コールをするなど、これもまた今までの集会では余り見られないコールであった。また、コールの内容も「国民なめんな!」「安倍晋三から国民守れ!」の反復や締めコールにおける「お前らが辞めるまで続けるから、首洗ってまっつけ!」といった攻めの姿勢を出した言葉も用いられ、これもまた過去十数年において余り見られないものであった。

なお、海外のデモや集会におけるコールが日本のそれよりハイテンポでリズムカルであることは、ニュース映像においても確認できる点ではあるが、今回のそれは、更にリズムを重視するとともに独自性を志向しているように感じられた。このような個性的なコールは他の多くの参加者がついて来られるかが肝となるが、ステージ後方のドラム隊が、それぞれのコールのリズムに合わせた鳴り物を打つことでメトロノームの役割を果たし、全体のリズム崩れを防いでいた。また集会中盤から終盤にかけては多くの参加者がクラブのフロアの如く、これらリズムに体を揺らし抗議するといった、これもまた過去に見たことのない光景が現出した。

これら「軽い雰囲気」と「洗練性」は、これまで政治集会やデモに参加したことのない者へのハードルを下げるとともに、デモ＝特別な人がやるもの、何か格好悪いもの、政治を語ることの気恥ずかしさ、といった印象を壊すのみならず、むしろ「何か格好悪いもの」「気恥ずかしいもの」から「ちょっと格好良いもの」への転換をもたらしつつあるように感じた。

そして、彼らは組織名からして「自由と民主主義のための学生緊急行動」となっている事に加え、彼らのシュプレヒコールやインタビューでも「わざわざ国会前で叫ばせるような政治をするな」「他にもやることはあるのに、仕方ないからやっている」といった事を述べているように、あくまで事態の切迫により、やらざるを得ない為に行っているというスタンスを取っている。これは、永続的な組織の維持、拡大を志向せず、あくまでも目的は「自由と民主主義」の確保にあるということであり、この存在意義は解りやすく、組織のための組織、組織のための運動といった内輪の都合に陥る（又は内輪の都合と見なされる）危険を排する事に繋がっている。

そして、上記これらの特徴それぞれが作用することによって広く参加者、賛同者を増やしているものと考えられる。更に基準となる組織がメジャー化したことも加わって、関西地方や東北地方、沖縄を拠点とするSEALDsの設立やSADL（関西）やGAP（群馬）といった同様の団体が各地に立ち上がったり連携したりする結果に結びついている。

特徴の最後に運営について述べる。

当日運営にかかわっていたスタッフ人数は不明であるが、個々のスタッフの役割はきちんと割り振られているようで、コール（喋り）、写真、映像、音響、交通整理、参加者への給水、補給などの役割が確認できた。給水所では参加者へ冷水やのど飴などが提供された。また、手の空いたスタッフにより参加者へ手渡しで水や飴の配給も行われた。喋りも含め、全てのスタッフが慣れているとは言えないが、運営全体に特段問題は見当たらなかった。

## 【まとめ】

今回の行動を通して見えてきた、参考とすべきポイントと、かつての活動が尻すぼみとなった原因を過去の運動を通して述べてまとめとする。

これまでも幅広い世代、党派を超えた幅広い人々の参加を求めた運動は存在していたし、それを目標とする運動も多くあった。2002年～2004年頃には有事法制問題や自衛隊のイラク派遣問題がクローズアップされる中で、各地でこれらは多くの参加者を集め話題になった。当時もデモ中に道路上でdie-inを行うなど新たな取り組みが行われたものの、2015年現在、当時のスタイルを踏襲、持続させた運動はほぼ消滅ないし活動停止状態にあると見てよい。

イラク戦争開始前後において、リベラル派、反戦派の運動は一時的な盛り上がりを見せたものの、アメリカ大統領の交代に伴う軍縮、国内においては自民党政権の退潮と民主党政権の誕生による野放図な戦争協力への危機感の薄れもあり、その後の活動はいずれも成功したとは言い難く、むしろ尻すぼみ的衰退をしたものが多い。

そのような状況に加え、中国による領海侵犯や経済成長を背景とする軍事費の増大、民主党政権への「決められない政治」のフレーズがメディアを賑わせ、大衆の不安が煽られる中、リベラル派、反戦派はその不安の受け皿となることが出来ず、また、そのような問題に対する明確な意思が示されなかったことも組織の一層の衰退を招いたものと考えられる。反面、ヘイトスピーチ団体などに代表される「右翼まがい」の団体が一部大衆の不安の受け皿となり、結果として、それら団体と思想を一にする安倍自民党政権が生まれたことは全くの皮肉である。

しかし、隆盛期にあっても衰退の遠因は存在していた。例としては、シュプレヒコールやアピールなどが1960年代ときほど変わらなかったり、集会、デモが毎回同じパターンとなり陳腐化したりといった「変わらないことによる弊害」、また新たな方向性を模索する中で、党派闘争に代表される政治集会、デモに対する人々のマイナスイメージを払拭しようとするあまり、不必要かつ方向性を見誤ったソフト化が行われた事による「変えたことによる弊害」がある。「変えたことによる弊害」には、参加者を個人参加者に限定したり、コールにおいて攻めのフレーズを封印したり、更にはデモをパレードと言い換え、バルーンや造花等を纏って練り歩いたりしたものが挙げられる。結果、本来訴えるべき主張があいまいとなったり、外部から見るとただの仮装行列のように見られたりする事態を招き、大衆に対する訴求力を欠く所謂「イタい」状況を生むに至った。

当然、「イタい」＝格好悪い、恥ずかしいものであるが故に、危機的状況を案じ、多数が参加しているうちは、多少の不満があっても団結し、異議を訴えようとする使命感がそれらの格好悪さや恥ずかしさを上回ったり、多数の中に紛れる事により個々に対する格好悪さが相対的に薄まったり、見え難くなったりするように感じるのであるが、危機的状況が緩和ないし忘れられようとする中で参加者が減少をはじめると、（特に組織や主催者に関係しない者は）参加への抵抗感が増し、参加者の更なる減少に拍車をかける結果となる。

この点において、先述のSEALDsを始めとする新たなスタイルの団体は（前団体SASPL時代を通して）状況の緩和期の中での活動は未経験であり、今後、事態の緩和期においての組織の在り方が注目される。